

駒場での研究と教育

金志英 (Ji-Young Kim)

早いもので駒場を離れてから半年以上もの月日が経ったが、今でも駒場での毎日を昨日の日のように思い浮かべることができる。古き良き思い出が忘れられない、ということもあるが、実を言うと、在職中にできた繋がりや縁が今もたくさん続いているからだ。たとえば、3年半という短い期間だったが、その間に会った学生たちからは今でも連絡をもらい、一緒に研究に取り組んだりしている。駒場で結ばれた繋がりには現在の私の生活の一部になっているのだ。

私の学生は大学院への進学を目指す人が多かった。学部2年生のときから私の授業をとっていたある学生もそんな一人である。彼女は現在、大学院進学の準備をしつつも、私の大学に勉強しにやって来て、私の授業にも参加する予定である。昨年と一昨年にオックスフォード大学に進学した二人の学生とは、卒業後に一緒に学術論文を書きあげた。最近そのうちの1つが出版されるにいった。こうした学生たちとの繋がりには、東京大学で得た大事な財産の1つであり、これから交流が深まっていくにつれ、ますます大事な財産となっていくだろう。

東京大学に着任したばかりのころ、何も知らない私のために、周りの先生方は駒場について色々説明してくださった。駒場だけでなく、日本の大学全体にも言えることでもあるのだが、先生方による駒場の紹介には、学務や教育など、研究以外の仕事が多いといった、思わず身が引きしめる話も含まれていた。日本の大学に初めて勤めることになった私が、駒場での仕事にスムーズに適應できるよう、上手な力の配分方法を伝授してくださったのだろう。しかし、新しい大学で働くことに胸を躍らせていた私は思わず「それなら、駒場のいいところはなんでしょう」とたずねてしまった。すると、先生方は険しい表情を崩し、口をそろえて「学生さんが優秀なところです」と答えてくださった。

私は当時、アメリカの大学での学位取得に続いて、日本学術振興会の海外特別研究員としての駒場での2年間の研究生活を終えたばかりで、研究以外はあまり経験もない駆け出しの教員であった。そのため、「学生が優秀である」ことが大学教員にとってどのような意味があるのか、はっきりとは分からなかった。正直なところ、研究以外のことに時間がとられてしまうという問題を学生が優秀であることによって埋め合わせることは到底不可能なことではないかと思った。しかし、こうした私の思いは、在職年数が経過するとともに薄れ、最終的には完全に消えることになった。

在職中、私は PEAK の授業をメインに担当した。大学院の授業は主に GSP に所属する学生たちが履修していた。授業がはじまった当初は互いに慣れず、効果的な授業をおこなうための試行錯誤が続いた。アメリカで教壇に立った経験はあったが、日本という新しい環境において、日本人の学生だけでなく、非常に幅広い文化的、教育的背景をもつ学生を相手に教えるのは簡単ではなかった。PEAK の学生は、世界中から、様々な目標をもって日本にやってくるので、勉学に対する態度、大学に対する期待、また、教育レベルまで一人ずつ大きく異なり、非常に多様であった。しかし、学生はいつも私が期待する以上の熱意で授業に参加してくれた。そんな学生たちのおかげで、だんだんと刺激的な授業のかたちが作り上げられていくことになった。私が PEAK で得た一番の財産は、こんな多様な学生たちと出会ったことであり、彼女たち、彼たちと一緒に討論し、研究したことである。

PEAK で指導するときは、学生が大学院に進学してから、修士論文や博士論文に発展させやすい研究トピックを選ぶようにした。トピックを選ぶところから始まり、仮説を構築し、データを集め、仮説を検証するまでの論文執筆すべての過程を学生と共に緻密に進めた。そのため、全ての卒業研究が、学生と私の共同作品であり、思い出の作品である。論文指導はいつも、私にとって学生と共に新しいことを学び、一緒に成長する場であった。

そうした学生との共同作品の 1 つが、2018 年に日本国際政治学会が発行する *International Relations of Asia-Pacific Affairs* という国際誌に掲載された。この研究を簡単に紹介したい。もともとの私の研究上の関心は日韓の歴史問題に向けられていたが、日中関係を分析したこの論文は、駒場にやってきてから私の興味関心が広がったことで生まれた研究の 1 つである。私が駒場に在職していた時期はちょうど、中国が世界の中で台頭し、東アジアの安保関係が大きく変化した時期であった。そうした国際情勢の変化のもと、日韓関係についても、二者関係 (bilateral relations) ではなく、アメリカと中国を中心として変化する北東アジアの多国間関係 (multilateral relations) の力学のなかで把握する必要性が急速に高まっていた。もちろん従来の二者関係の枠組みで研究を進めることもできたわけだが、私の周りの学生たちがそれを許さなかった、とも言える。駒場には、世界中、特に、中国を中心としたアジア全体から、留学生が集まってくる。そのため、学生全体の興味関心も、国際情勢を反映し、現実の北東アジアのダイナミクスに集中しやすくなる傾向がある。こうした学生の関心に応えるため、研究テーマを広げることになったわけであるが、これは教育者としてだけでなく研究者として私が成長する貴重なキッカケになったと思う。学生諸子に感謝したい。

さて、共同研究の論文に話を戻そう。日本と中国は、日本と韓国と同じように、歴史教科書、靖国参拝、また、領土問題といった問題を抱えている。こうした問題が日中関係全般に影響を与えてきた。こうした数ある問題のうち、私たちは 2000 年代半ばから深

刻になった尖閣諸島問題に焦点をあてた。日中の資料を調べるなかで明らかになったのは、たしかに日中関係は尖閣諸島問題がヒートアップしたときに悪化したことは事実であるが、悪化しても比較的すぐに関係が回復するという一定のパターンを見せてきたということである。すなわち、日中両国は、尖閣諸島問題をめぐる緊張が生じたときでも、その危機に対処する強い意志を持って、両国の関係を安定的に管理してきたのである。この研究は、日中関係が悪化の一途をたどっていると主張する一部の悲観論者に対して、強力な反論を提示できたと考えている。

この時期における国際情勢の変化は目覚ましいものがあり、日本の安保政策は、北東アジアのなかだけでなく、アジア太平洋地域のなかでも考えなくてはいけなくなったと言える。オーストラリア出身の学生と進めることになった日豪関係に関する研究も、こうした国際情勢をタイムリーに映しだしている。とは言っても、もともとは、この学生は日韓関係に興味をもって私の研究室にやってきたのだが、日韓だけでなく、アジア太平洋地域も視野に入れて議論を重ねていくなか、日韓関係と日豪関係の隠れた類似性と相違を見つけることになったという経緯がある。

この研究は、アイデンティティ・ポリティクスという私が日韓関係の分析に用いてきた理論を日豪関係に当てはめることで進めていった。日本と韓国は、地理的な近接性、軍事問題、領土問題などの点で、中国と北朝鮮に対する脅威を共通認識として持っている。また、日本とオーストラリアも、中国の修正主義的な軍事活動に対する脅威を共通認識として持っている。ただし、オーストラリアからすれば、中国に抱く脅威は直接的なものというより、潜在的なものである。それにもかかわらず、日本は韓国よりもオーストラリアと強力な安保関係を結んでいる。その理由はどんなところにあるのだろうか。

アイデンティティ・ポリティクスの視点にたてば、この問いに対する答えは、日本にとってオーストラリアや韓国がどのようなアイデンティティを持っているのかという観点から検討される。たとえば、日本の政府刊行物を継時比較すると、日本はこれまでオーストラリアを、自由民主主義や国際規範遵守といった「価値 (value)」を日本と共通して持つ国であると規定し、それを強調してきた一方、韓国をこうした価値を共有する国であるとみなす考えが薄らいできていることが分かる。各国に対するこうした認識を背景に、日本は2000年以降オーストラリアと持続的に安保関係を強め、アメリカに次ぐ同盟国として位置づけるに至った、と答えることができるわけである。こうした分析は、安保関係にとってアイデンティティ・ポリティクスが重要な変数になることを示している。

駒場での私の研究は、国家間の安保関係とアイデンティティの関連を中心に進めていったが、それと同時に、地域学的なアプローチも取り入れ、日本国内での歴史問題の認識についても研究を進めた。2017年にPacific Affairsという国際誌で発表した論文は、日本国内における慰安婦問題のディスコースの変化を追ったものである。同じ2017年にこの研究を日本国際問題研究所が主催するシンポジウムで発表した。まさに日韓関係が過

去最悪とも言われた時期であったため、この問題について冷静な議論が成立しないほど状況が悪化してしまった現状を非常にもどかしく残念に感じたことを覚えている。冷静な議論には、政治的立場にとらわれない、学術的観点からの分析が欠かせない。両国の未来のためにも、もっと研究を進めなくてはいけないという使命感を強く抱いた1日でもあった。

慰安婦問題は、政治的に極めてセンシティブな問題であるため、日本でも韓国でも研究することが非常に難しい問題である。こうした難しさがつきまとうトピックを研究する駆け出しの研究者であった私を、同僚として迎え入れてくださった東京大学の先生方、特に地域研究専攻の先生方の懐の深さに、改めて感謝を申し上げたい。

東京大学での私の研究は、たくさんの学生の熱意によって成し遂げられた。一人での研究活動が当たり前だった私にとって、これは全く思いがけないことであった。学生たちとの議論は刺激にあふれ、そのおかげで、当初予想もしなかった充実した毎日を送ることができた。私が駒場にやってきたとき「学生が優秀である」と教えてくださった先生方の気持ちが今は身をもって分かる。そして、何よりも、地域文化研究専攻、PEAK、そして英語部会の先生方は、お忙しいなかでもいつも温かく接してくださり、そのことは他の何とも比較できないほど、私の毎日に落ち着きと豊かさをもたらしてくれた。駒場での経験は、何にも代えられない財産であり、私がこれから教育者としても研究者としても成長していく大事な基礎となったと思う。恩返しになるかは分からないが、駒場で得た繋がりや経験を、将来の日韓関係研究、さらに、日韓関係の発展につなげていきたい。

いつも温かい笑顔で、私の日本での生活を支えてくださった同僚の先生の一人ひとりに心から感謝の気持ちをお伝えし、この至らぬ文章を終えたい。